

複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の変遷

北 崎 勇 帆

キーワード：命令形，放任，逆接仮定，条件文

要 旨

本稿では、動詞「あり」「す（る）」の命令形を用いて逆接仮定的な構文を作る複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」について、その形態の歴史の変遷を調査した。「であれ」相当形式は中古に「用言連用形+もあれ」「体言+にもあれ」として発生し、中世以降、体言が前接する場合に限って「にてもあれ」「でもあれ」へと姿を変える。「にせよ」「にしろ」相当形式は中世頃に「動詞連用形+もせよ」として発生し、近世に「にもせよ」「にもしろ」が現れると、次第に「であれ」相当形式の使用数を上回る。この移行の要因として、動作についての逆接仮定を示すために補助動詞「す」が採用されたこと、体言・用言のいずれに対しても同形態で接続できる「にもせよ」「にもしろ」に利便性があったことを論じた。

1 はじめに

動詞「あり」「す（る）」の命令形「あれ」「せよ」「しろ」は、以下のような「であれ」「にせよ」「にしろ」という複合助詞^{注1}となって、逆接仮定の構文を作ることがある。

- (1) 理由は何であれ、暴力はよくないよ。
- (2) 参加するにせよ、しないにせよ、とりあえず連絡を下さい。
- (3) そばにしろ、うどんにしろ、麺類なら何でもいいんだ。

動詞命令形におけるこの用法の存在の指摘は、草野清民『草野氏日本文法 全』が早く、(5)のような例について「仮説的ノ意ヲ表ハスニ用キル。コレハ放任的ノ意ヲ顯ハスモノト、同物ナルカモ知ルベカラズ」(草野 1901: 111)と述べている。また、山田孝雄も草野の指摘を踏まえつつ、(4)のような例について「もあれ」の縮約形である「まれ」を「放任の語法をなす時に多く用ゐらる」(山田 1908: 754)と説明している^{注2}。

- (4) 人にまれ鬼にまれかへし奉れ。 (源氏物語 蜻蛉 山田 1908: 755)
- (5) その川上より流れん物を、いかにも〜鬼にてもあれ、何にてもあれ抱けといひて行きぬ。 (宇治拾遺物語 卷九 草野 1901: 111)

中古・中世ではこのように、現代語における「であれ」に相当する形式として、「に

もあれ」「にまれ」や「にてもあれ」といった形式が用いられていた。中村（1993）は中古和文を中心としてこの形式の整理を行っており、(6)二項例示の対句形式や、(7)多項例示、(8)不定語に接続する構文が多く見られることを指摘している^{注3}。

(6) ふるきにもあれあたらしきにもあれ、人はさらに見給はじ。

(うつほ物語 国譲中 中村 1993: 230)

(7) むしろは荒磯海の浦にうつるなる出雲むしろにまれ、生の松原のほとりに出で来る筑紫むしろにまれ、みるをが浦に刈るなるみつふさむしろにまれ、そこに入る入江に刈るなるたなみむしろにまれ、七条のなはむしろにまれ、侍らむを貸させ給へ。

(堤中納言物語 よしなしごと 中村 1993: 234)

(8) なに事にもあれ、急ぎてものへいくべきをりに、まづ我さるべき所へいくとて、ただいまおせんとて出でぬる車待つほどこそ、いと心もとなけれ。

(枕草子 一六〇 中村 1993: 237)

一方で、「にせよ」に相当する形式は中古の時点ではまだ用いられていないようである。中村（1993）では『古事談』の「もせよ」の例(9)が挙げられるのみで、同氏による、近代評論文を対象とした論考には「中世までには、まったく見ることのできなかつた「…にせよ…にせよ」が、その近代文語文のなかには既に頻用されている。したがって、そこに至るまでの経緯を探ることは、今回の調査資料からは不可能となった」（中村 2006: 160）と述べられる。種々の逆接仮定表現を扱った山口（1995）にも中世後期以降の例が僅かに挙げられるのみであって、発生時期は判然としない。

(9) ムカシハ勝モセヨ負モセヨ取昇進シテコソ至候ヘト云云（古事談下 中村 1993: 248）

(10) 守道者ハ、天道ハクミシモセヨ、クミセイデモアレ、各々吾ガ志ニ從テ守道マデヨ

(史記抄 老子伯夷伝 山口 1995: 8)

(11) たとへせうこがなひにもせよ、モウ此うへはこつちから、事を正すは千太郎。

(与話情浮名横櫛 山口 1995: 9)

そこで、本稿では「あり」の命令形を用いた「であれ」に相当する形式を「であれ」類、「す(る)」の命令形を用いた「にせよ」「にしろ」に相当する形式を「にせよ」類と呼び、これらの形式を対象として、「であれ」類・「にせよ」類それぞれの史的変遷の過程を調査する。その調査結果をもとに、「であれ」類・「にせよ」類の発生と、それぞれの変遷の要因・背景を論じる。

以下、本稿の構成を示す。第2節で中古から近現代に至るまで、「であれ」類・「にせよ」類とこれらに類する形式の用例を調査し、その結果を示す。第3節では第2節に示した用例を基に形態の変遷をまとめ、第4節ではその結果に基づき、「であれ」類の成立と、「であれ」類から「にせよ」類への使用の推移の要因・背景を論じる。第5節では本稿のまとめと今後の展望を提示する。

2 用例調査

各時代の資料に見られる「であれ」類・「にせよ」類と、その他の用言命令形^{注4}を用いて逆接仮定の構文を作る例を調査し、使用の見られる中古以降について述べる。

2.1 中古

上代語資料に見られない^{注5}「であれ」類が、中古の訓点資料に数多く見られる。和文資料と比べて「まれ」と縮約された例が多い。以下に例を挙げる。

- (12) 世尊現ニ在シテ**マレ**、若ハ涅槃ニ入りタマヒテ**マレ**、我当ニ云何ニシテカ菩薩ノ禁戒ヲ分別シ了知セム。
(聖語藏本菩薩善戒經平安初期点 卷一)
- (13) 衆生の〔於〕此の瞻部の内に**マレ**、或は〔於〕他方世界の中に**マレ**ありて、作レル所の種々の勝(れ)たる福因には、我レ今皆悉ク隨喜を生ず。
(西大寺本金光明最勝王經古点 卷二)
- (14) 有仏に**マレ**無仏に**マレ**、性相常爾なることを知(り)ぬ。
(高山寺本大毘盧遮那成仏経疏永保二年点 卷二)

和文資料にも(15)「にもあれ」、(16)「にてもあれ」という形式が見られる他、「もあれ」が縮約された(17)「にまれ」や「にてまれ」も認められる(以降、「もあれ」と「まれ」は、「もあれ」に代表させる)。

- (15) みかどには、つとめてより、さべき人〜にの給て、「いかに**もあれ**、人のこん、かくなんと申せ」との給て、けふはしん殿におはす。
(うつほ物語 楼上下)
- (16) 中納言の**にもあれ**、大納言に**にてもあれ**、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引きやらせよ。
(落窪物語 卷二)
- (17) 親のいふやう、「…今日いかに**まれ**、このことを定めてむ。…」といふ時に、…
(大和物語 一四七)

上に挙げたのは体言に接続する例であるが、活用語に接続する場合は「連用形+も+あれ」の形で用いられるようである。

- (18) 君といへば 見**まれ**見**ずまれ** 富士の嶺の めづらしげなく 燃ゆるわが恋
(古今和歌集 六八〇)
- (19) すべて、よく**もあれ**あしく**もあれ**、おとこ、女にてぞあるべかりける。
(うつほ物語 蔵開上)

また、「も」に続く動詞は「あり」に限られるわけではなく、尊敬語の「おはす」が用いられる例が『うつほ物語』に見られる。

- (20) 「…ありとあるかぎり、みこ**にもおはせよ**、上らうにもあれ、おもてやはみえ給へる。…」との給へば、…
(うつほ物語 国讓中)

ここで、中古和文資料に見られる用例を「活用語+もあれ」「非活用語+にもあれ」「非

活用語+にてもあれ」の3種に大別し、それぞれの用例数を表1に示す^{注6}。

表1 中古和文資料における用例分布

資料名	活もあれ	非活にもあれ	非活にてもあれ
古今和歌集	1		
土佐日記	1	1	
大和物語		1	
うつほ物語	3	6	
落窪物語		4	1
枕草子		3	
源氏物語		4	
紫式部日記		1	
栄花物語		1	

2.2 中世前期

中世に入っても引き続き「にもあれ」「にてもあれ」が用いられており、室町期に近づくにつれて、中古の時点では『落窪物語』に1例しか見られなかった「にてもあれ」の使用が増加する。

(21) 若ハ住持長老ニテモアレ、若ハ師匠知識ニテモアレ、不当ナラバ、慈悲心・老婆心ニテ能教訓誘引スベキ也。(正法眼蔵随聞記 卷二)

(22) …主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、悪しからむことをば、必ずいさむべきと思へども、世の末にこのことかなはず。(十訓抄 卷六)

また、(9)にも示したように、動詞に接続して「であれ」類と同様の意を示す「もせよ」の例が見られるようになる^{注7}。「にせよ」類の先駆けと思われる。

(23) 思切テ、明日ノ活計ナクハ、飢死モセヨ、寒死モセヨ、今日一日道ヲ聞テ、仏意ニ随テ死ント思フ心ヲ、先ヅ可_レ発也。(正法眼蔵随聞記 卷三)

用例の分布を表2に示す^{注8}。

表2 中世前期資料における用例の分布

資料名	活もあれ	非活にもあれ	非活にてもあれ	活もせよ
狭衣物語		1		
法華百座聞書抄		1		
今昔物語集	1	12*		
打聞集		1		
梁塵秘抄		1		

古事談			1
徒然草	2		
正法眼蔵	2		
正法眼蔵随聞記	1	1	1
宇治拾遺物語	2	1	
十訓抄	3	2	
日蓮遺文	3	1	
沙石集	1		
堤中納言物語	12	3	
延慶本平家物語		2	

2.3 中世後期

室町期になると「にてもあれ」の使用がより顕著になり、「にもあれ」の例が見られなくなる。「にて」が音縮約し「で」となることにより、「にてもあれ」が(24)「でもあれ」, 「にても候へ」が(25)「でも候へ」となった例が『覚一本平家物語』以降に多く見られる。

(24) なんであれ、敵の方より出きたらん物をのがすべき様なし。(覚一本平家物語 巻九)

(25) いくたびでも候へ、こはからう方へは教経うけ給はてむかひ候はん。(同 巻九)

「でもあれ」の使用は特に抄物に顕著であり、その縮約である(26)「であれ」がさらに転じた(27)「でまり」(湯澤 1929)も見られる。

(26) 左伝モ帝王年代ヲコソ編シタレ、何書テマレ、史記ヨリサキニ此体制ニシタハナイソ。(史記抄 補史記序)

(27) 是八月花ヲミ何デマリ物ニフレテソコデ心ノ中人ヲ思出ス歟(中興禅林風月集抄)

ロドリゲス『日本大文典』にも「許容法」「讓歩法」としてこの形式への言及がある。

(28)「にてもあれ」, (29)「でもあれ」, (30)「もせよ」の例が挙げられる一方で、「にもあれ」の例は見られないことに注目したい。

(28) Voya nitemo, conitemo, mataua tarenitemo are.

(29) Taredemo are.

(30) Aguemo xeyo caxi. (日本大文典 第一巻)

用例の分布を次頁表 3 に示す^{注9}。

なお、キリシタン資料において、文語体のものには「にてもあれ」が、口語体のものには「でもあれ」が現れやすいようであり、ここからも「にてもあれ」から「でもあれ」への遷移が窺える。

(31) いはひの日ごとに此世をいで、をはりなきよるこびにいたるこちして、何にてもあれ、あらためておもひたつべき事かんよう也。(こんてむつすむん地)

(32) 然れども、誰にてもあれ見かけよき様に恐るべき所を恐れ吹くるほどの風に靡かざる事は又專要なり。(ぎやどべかどる 下)

表3 中世後期資料における用例の分布

資料名	活 もあれ	非活 にてもあれ	非活 でもあれ	活 もせよ
覚一本平家物語	1	1	2	
連歌論書		3		
能楽論書		7		
正徹物語		3		
史記桃源抄		1	130	1
湯山聯句抄			4	
六物図抄		1	7	
句双紙抄			2	
中華若木詩抄		5	4	
蒙求抄			36	
中興禪林風月集抄			6	
ロドリゲス大文典		○	○	○
天草版平家物語		1	5	
エソポ			2	
虎明本狂言集		4	1	

2.4 近世前期

近世に入ると、仮名草子や喃本、浮世草子に、これまで用いられていなかった(33)「にもせよ」が見られるようになる^{注10}。東国の『雑兵物語』には(34)「にもしろ」が見られ、一般に言われる「せよ」「しろ」の東西差(柳田1996など)と並行的である。

(33) 一休おもはるゝは、あはれどく**にもせよ**、しぬるとも、師の出られなば、くふべしとおもふて、まちける所に、折ふし師匠用ありて出らるゝ。(一休諸国物語 卷三)

(34) 仮令名が知ても、味噌こしせつかひすりこぎ貝杓子の様なもの**にもしろ**、いかに人々が知ばとて、数を多く引付ければ、… (雑兵物語 下)

「であれ」類は、中世後期同様「にてもあれ」と「でもあれ」が並行して用いられているが、「にせよ」類に比してその使用は少ない。

2.5 近世後期

近世後期になると、上方・江戸ともに口語資料に「であれ」類が見られなくなる。得られた例は「にせよ」類のみであり、上方語資料では(35)「にもせよ」が、江戸語資料では(36)「にもしろ」が優位である^{注11}。

(35) 譬へわれが心に悪いことが有**にもせよ**それがせめて一ト色なればア、しれたれば証事がない。(南遊記 卷五)

- (36) エなるほど曇りはくもって、エまづサ、富士筑波はおまけにもしろサ、実にまた富士でもこれほどのゆきは見られやすめえ。(人間万事虚誕計)
 「にもせよ」「にもしろ」からそれぞれ「も」が脱落した「にせよ」「にしろ」もこの頃から見られるようである。「にしろ」は「何にしろ」として用いられることが多い。
- (37) 古左衛門「お江戸に産れた有がたい事には、年中自由が足る。初物は一ばんがけに食ふなり。その外青物にせよ、魚類にせよ、四季ともに是一種無いといふものがござりませぬ」(浮世風呂 四編下)
- (38) 与九「また折を見て訴訟のしかたもあろう。なんにしろ、けふは内が取込であるから、又そのうちに」(東海道中膝栗毛 発端)
 「であれ」類の用例は読本等の文語体資料に限られる。
- (39) 彼獣は、火の中にもあれ、水の上にもあれ、行んと思ふかたへは、瞬く間にうち涉るといふに、…(椿説弓張月 拾遺巻一)
 近世前期・後期の用例を併せ、資料のジャンルごとに表4に示す^{注12}。

表4 近世資料における用例の分布

資料群／形態		であれ類		にせよ類							
				活				非活			
		にても	でも	せよ		しろ		せよ		しろ	
にも	に			にも	に	にも	に	にも	に		
近世前期	東国語資料	1									1
	前期噺本	8	1					8			
	浮世草子	4	1	3				29			
	近松世話浄瑠璃			3				4			
上方	上方噺本			1				7			
	上方洒落本			3		1		7		1	
近世後期	江戸							11			12
	江戸							8		2	4
	江戸							3			
	江戸			1				1	1	3	10
	江戸			3		6		6		2	11

2.6 近代以降

「でもあれ」の「も」が落ちた「であれ」は近代以降に見られるようになる。「にせよ」「にしろ」は近世後期に既に確認できるため、ここで現代語と同じ「であれ」「にせよ」「にしろ」の体系が出揃うことになる。

3 変遷のまとめ

第2節では、動詞命令形を用いて逆接仮定的な意を示す「であれ」「にせよ」について、諸形式の各時代における使用を概観した。表1-4を合算し、近代・現代における調査結果を加えて、例数とその使用率を表5に示す。

表5 各時代における「であれ」類・「にせよ」類の使用状況

時代/ 形態	「であれ」類					「にせよ」類				
	用も	にも	にても	でも	で	用も	にも	に	にも	に
中古	5 (18.5%)	21 (77.8%)	1 (3.7%)							
中世前期	2 (3.6%)	41 (74.5%)	10 (18.2%)			2 (3.6%)				
中世後期	1 (0.4%)		26 (11.5%)	199 (87.7%)		1 (0.4%)				
近世前期			13 (20.6%)	2 (3.2%)		47 (74.6%)		1 (1.6%)		
近世後期	上方					18 (90.0%)		2 (10.0%)		
	江戸					33 (39.3%)	1 (1.2%)	13 (15.5%)	37 (43.6%)	
近代		9 (1.4%)		1 (0.2%)	25 (4.0%)	108 (17.4%)	206 (33.1%)	11 (1.8%)	271 (43.6%)	
現代					11 (22.9%)		16 (33.3%)		21 (43.8%)	

以上の推移を記述する。まず、「であれ」類は、中古に「もあれ」が、名詞が前接する場合に「にもあれ」、活用語に付く場合に「連用形+もあれ」として用いられ、このうち名詞が前接する場合は中世以降、「にてもあれ」が勢力を増す。中世後期には「にてもあれ」の「にて」が縮約した「でもあれ」が用いられるようになるが、近世以降になると「であれ」類は口語資料に見出しにくくなり、近世後期には読本などの文語的・雅語的な資料にのみその例が見られるようになる。そのうち、近代に「も」が落ちた「であれ」が用いられるようになる。「にせよ」類の源流は中世前期から見られる「動詞連用形+もせよ」に求められる。近世前期には「にもせよ」(東国では「にもしろ」の例あり)、近世後期には「も」が落ちた「にせよ」「にしろ」が現れ、以上の過程を経て、現代語と同様の「であれ」「にせよ」「にしろ」という体系が出揃う。

以上のように、動詞命令形を用いて逆接仮定を示す形式であっても、「であれ」類の

発生は「にせよ」類に先行するようである。なぜ、「であれ」類が既にあるところに新しく「にせよ」類が用いられ始め、次第に「であれ」類の使用数を圧倒するようになったのだろうか。次節で、「であれ」類の成立について述べたのち、「もせよ」の成立と、「であれ」類から「にせよ」類への移行の要因について論じる。

4 「であれ」類の成立と「にせよ」類への移行について

4.1 「であれ」類の成立

まず、「であれ」類の成立について述べる。

命令表現は「話し手が聞き手に未実現の事態の成立を要求する表現」（仁田 1991，安達 2002 など）として捉えられるが、命令形による要求の表示が行われていても、構文条件によっては必ずしも「事態の成立を要求する」文にならない。上代に見られる「未然形+ば+命令形」という「同語反復」によって放任を表す形式（山口 1976）がそれである。

(40) うるはしと さ寝しさ寝てば 刈薦の みだればみだれ〈美陀礼婆美陀礼〉さ寝し
しさ寝てば
（古事記歌謡 八〇 山口 1976：51）

(41) 大船を 漕ぎのまにまに 岩に触れ 覆らば覆れ〈覆者覆〉妹によりては
（万葉集 卷四 五五七 山口 1976：51）

このような、命令形を用いながらも命令を意味しない構文が生まれたことを背景として、「A もしくは¬A」や不定語という「想定される集合の全体」を示す表現を用いることによって「その事態がどのようなものでもある」ということを提示し、逆接仮定的な読みを与える「もあれ」の形式が発生したものと思われる。

4.2 「にせよ」類の成立

次に、中世における「もせよ」の成立について述べる。現代語において、命令形による逆接仮定の構文に用いられる複合助詞は「であれ」「にせよ」「にしろ」に限られ、『うつほ物語』に見られた「にもおはせよ」や、主に書状に見られる「にても候へ」^{注13}のように「あり」相当の敬語動詞を用いることも、以下の例のように「あり」相当でない動詞を用いることもできない（例えば、「何でいらっしやれ」などと言うことはない）。

(42) 左大将のたまふやう、「…いかに**もなれ**、何条ことかあらんと思へば、いのらぬなり」とのたまひければ、…
（宇治拾遺物語 卷一四）

(43) 敵にも**おそはれよ**、山越の狩を**もせよ**、深山にまよひたらん時は、老馬に手綱をうちかけて、さきにおたててゆけ。
（覚一本平家物語 卷九）

(44) いくさは又おやもうたれよ、子もうたれよ、死ぬればのりこへ〜た、かふ候。
（同 卷五）

このように「あり」以外の動詞が用いられるのは、現代語において「ある」「する」のみの使用が許容されているこの表現が、中古・中世の時点では範列的な自由度を保持

していたことを示唆する。『古事談』などに見られる「もせよ」も、「も+命令形」のうちの選択肢のうちの一つにすぎなかったものとも思われるが、「勝つ」「負く」「物語す」「餓死す」「与す」といった語に接続することから、「もあれ」が示すことができない「ある動作をしても」という意味合いを表すために、新たに補助動詞「す」が採用されたと考える^{注14}。(18)に示したように『古今和歌集』には「生まれ見ずまれ」の例があったが、室町後期の古注『古今榮雅抄』では以下(45)のように「見もせよ」と解説されていることから、この意識が窺えるかと思う^{注15}。

(45) きみといへば見もせよみずもあれ。ふじのねの。いつもけぶりのたつごとく。思ひにもゆると也。君てへばと書る本も有。みまれ見ずまれば。見もせよ見ずもあれなり。 (古今榮雅抄 卷一一)

4.3 「にせよ」類への移行

以上の経緯によって成立した「もせよ」は、当初は「～をしても」という、動作についての逆接仮定を示す場合にのみ用いられていたが、補助動詞「す」が状態的な「あり」と同等の用いられ方をする^{注16}ことによって「あり」相当の意味合いを持ち、「名詞+にもせよ(しろ)」という体言に接続する形式が成立した。その一方、「にもせよ(しろ)」には用言が直接接続することもできる^{注17}ため、「にもせよ(しろ)」は体言・用言のいずれについても、同形態で接続することができるようになる。こうして、「体言/用言+にもせよ(しろ)」が接続可能性の高さという利便性を持ち、そのことが「にせよ」類の使用を後押しした(この選択の要因は小柳 2014 の「機能的利便性」に該当する)ために、「であれ」類から「にせよ」類への使用の移行が生じたものと考えたい^{注18}。

なお、近世後期に「も」が脱落した「にせよ(しろ)」が見られ始めることについては、中世の「もせよ」の時点では「も」が統語的に不可欠であり、また、「題目を不確定のものとして提示する」という「も」の機能(大野 1993)もこの表現の成立に必須であったが、「にもせよ(しろ)」の成立後、「不定語+にもせよ(しろ)」が慣用的に用いられることによって「も」の付加は次第に義務的でなくなり、抜け落ちた形が許容されたものと見る^{注19}。

5 結論

本稿では、「あり」「す(る)」の動詞命令形を用いて逆接仮定を示す「であれ」「にせよ」「にしろ」について、次の三点を示した。

- ・「であれ」類は中古において、用言に付く場合は「用言連用形+もあれ」、体言に付く場合は「にもあれ」が用いられていたが、時代を降るにつれて、体言に付く場合に限って「にてもあれ」「でもあれ」へと移行した。中世には「動詞連用形+もせよ」という形式が数例見られ、近世には「にもせよ」が成立し、次第に「であれ」類に代わっ

て用いられるようになる。「も」が脱落した「であれ」「にせよ」「にしろ」が出揃うのは近代になってからである。

- ・「であれ」類は、「未然形+ば+命令形」という、特殊な文型を取る「放任」用法を背景として成立した。これは、本来聞き手に行為の遂行を求めるはずの命令文が、特殊な文型の中でその行為要求的な要素を失ったことによる。
- ・中世において「もせよ」が採用されたのは、「もあれ」によって表すことのできなかった、「(ある動作)をしても」という逆接仮定の意味合いを示すためであった。その後、「あり」と「す」の交渉によって体言に接続する「にもせよ(しろ)」が成立し、「にもせよ(しろ)」は体言・用言のいずれに対しても、同一の形態で接続することができるようになる。この利便性が「にせよ」類の使用を後押しし、「であれ」類から「にせよ」類への使用の移行が生じたことを論じた。

なお、命令形が逆接仮定条件を表すようになる現象は、いわゆる「文法化」の一般的傾向として指摘される「機能的な意味から対人的な意味へ」という「対人化」の傾向に反する(小柳 2015)。確かにこうした変化は稀ではあるが、その一方で、命令形式に由来する表現が仮定条件的な表現へと変化する現象は、動詞テ形+補助動詞「みる」の命令形を用いた条件文(菊田 2012; 北崎 2015)にも見られる。(46)の段階では「てみる」行為が意志的であるが、実質的には「寄る」ことを要求しておらず、さらに(47)では「てみる」行為が非意志的であり、行為要求的な要素を喪失している。

(46) 大名「此御せいたうたゞしひおりから、そのつれな事をいふてめいわくするな、
よつてみようちはなすほどに」 (虎明本狂言集 まんぢう 北崎 2015: 223)

(47) 雨など降てみやんせ。引窓に障子がないさかい。(浮世風呂 四編中 菊田 2012: 65)

そのほか程度は異なるものの、他言語においても「命令から条件へ」という現象が見られ(Clerk 1993; Boogaart & Trnavac 2004; 鈴木 2012)、これは傾向に反するものでありながらも、ある程度通言語的に見られる現象のようである。今後、検討したい。

注1 標題の「複合助詞」について、後述するように、固定化する以前の当該型式には範列的な自由度が認められるため、近代語以前を含めて一概に複合助詞として扱うことには問題が残るが、現代語における複合助詞相当の形式の意として「複合助詞」と称しておく。

注2 引用・用例中の下線・強調は筆者によるものであり、旧字・異体字については、適宜通行字に改めた。

注3 現代語における当該表現を扱った富樫(2005)も同様の特徴を指摘している。

注4 この「あれ」が命令形の「あれ」ではなく、已然形の「あれ」に由来するものであって、異活用にして同形態である命令形「あれ」と混同され、「にもせよ」を生み出したという可能性も考えられる。本稿は、「時しもあれ」「折りしもあれ」のように「あれ」が已然形と解釈される(中村 2013 など)慣用表現には「時しもこそあれ」「折りしもこそあれ」のよ

うに「こそ」を伴う例がある一方で、「にもあれ」にはそれが見られないこと、うつほの「にもおはせよ」のように中古の時点で「も+命令形」としか解し得ない例が見られること、時代は降るが『解脫門義聴集記』に「イカニモアラバアレ」という表現が見られることを根拠とし、「あれ」の活用が命令形であるという立場を取る。

- ・イカニモ。アラハアレ。此ノ信智ヲオモハヘテ。ホレ〜トシテ。四五六六年アラハ。事ヲシ出タサムスル也。
(解脫門義聴集記 第三)

注5 上代語の資料には「であれ」類は認められない。東野(1996)は長屋王家出土木簡に見られる「阿礼」を本稿で言うところの「であれ」類の「あれ」と解釈し、「糶にあれ粟にあれ、一々の物、今二斗進れ」と訓じており(東野1996:32)、犬飼(1998)はその訓の根拠を『今昔物語集』の「にあれ」に求める。

- ・(表) 勅旨 石川夫人 糶_{阿礼} 粟_{阿礼} / (裏) 一々物今二斗進 内東人

(長屋王家木簡 一 238・23・3 011 TF11)

- ・何ニアレ、人ノ音ナメリ。去来、此堀出ダシテ見ム (今昔物語集 卷二六 犬飼1998:54)

しかし、係助詞「も」を介在させず「にあれ」とする例は今昔の1例以外に見られないため、ここでその「にあれ」の訓を採るのは不適切である。さらに、木簡表面を「糶であれ粟であれ」と解釈するならば、裏面の「一々の物」は「それぞれを二斗」でなく「いずれか一方を二斗」と解さなければならない。「ひとつひとつ」を「いずれか片方」と解釈する例は『うつほ物語』等に見られるが、そう解釈するとしても、犬飼(1998)に挙げられる「一々」の例にも「田辺郷長里正一々人」とあるように、単純な並列を示すために「あれ」は必須ではないものと思われる。

以上の理由により、本稿では工藤(1997)、佐野(2007)が論じる通り「阿礼」を「もち米を潰したもの」と捉え、この例を「であれ」類の初出と認めない立場を取る。

注6 「AにもあれBにもあれ」のような並列構文は1例として数える。『うつほ物語』に見られた「にもおはせよ」1例は『非活にもあれ』列に計上した。以降、「おはせよ」「ござれ」「候へ」のような「あり」相当の敬語動詞の命令形は「あれ」に数え入れる。

注7 その他、能因本系統の『枕草子』にのみ見られ、三卷本・前田本・堺本系統の諸本には見られない例がある。

- ・物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらにいらへうちして、こと人と物言ひまぎらはす人、いとにくし
(能因本枕草子 三三四)

注8 今昔の「非活にもあれ」12例は、注5に示した「にあれ」1例を含む。『堤中納言物語』の例はすべて「よしなしごと」に集中して見られるものであるため、中世前期の例に含めることとした。また、米沢本『沙石集』には「破戒ノ比丘ノ不浄財ヲタクハエンヲハ、知ルニモアレ、不知ラニモアレ、供養セハ、能施モ所施モ地獄ニ入ヘシト説ケリ」(巻二)の例がある。「連体形+ニモアレ」とする例は稀であるが、訓点資料にも数例見受けられること、当該箇所が『大般涅槃経』からの引用・訓読部であることから、おそらくは訓読語の影響を受けているものと思われる。なお、上に挙げた米沢本を底本とする『新全集』版では「知るにもあれ、知らずにもあれ」と読み下されているが、「知るにもあれ、知らざるにもあれ」と読むのが妥当であろう。

注9 「でまり」は「でもあれ」に一括する。ロドリゲス大文典については、資料中に見られたものに○を付した。

注10 「にもせよ」については、湯澤(1954)の動詞の活用形の項で「假定・放任を表すもの」

として取り上げられ、「ほとんど『する』意の動詞、及びまれに『ある』を用いるぐらいのものである」と説明されている。また、「『する』の命令形『しろ』は『何に』と一緒にあって、他を放任する意味の副詞となる。この『しろ』の代りに『せよ』を用いることもあり、また『何に』の下に『も』の入ることがある」(湯澤 1954: 148)ともあるが、成立の順序を考えれば「しろ」より「せよ」の方が早く、「も」は挿入されたというより、むしろ脱落したものである。

注 11 「にもせよ」「にしろ」に比して、「にせよ」「にもしろ」の使用数は極端に少ない。「も」の脱落が口語的な現象であると考えた場合、口語的な「しろ」と口語的でない「も」は親和性が低く、口語的な「も」の脱落という現象と口語的でない「せよ」も親和性が低いためであると考えられる。なお、山口 (1995) は「にもしろ」「にもせよ」について「『も』の共起しない例が出てくるのは明治以降であろうか」(山口 1995: 9)と述べるが、用例(37)(38)に示したように、「も」が脱落し始めるのは明治より早く、近世後期頃である。

注 12 「にもあれ」が近世後期漸本に 2 例、人情本に 4 例あるが、いずれも文語体の例であるため採らなかった。

注 13 書状・記録の類は所謂候文の文体的特徴により、「にても候へ」の使用が「にもあれ」「にてもあれ」に比して多い。ここでは用例数を挙げるに留めるが、調査した中世～近世の書状・古記録に「にもあれ」「にまれ」は 7 例、「にてもあれ」は 9 例のみであるのに対し、「にても候へ」は 136 例(他、「にても御座ませ」が 1 例)であった。

・もし六月すき候は、いかなるところにても候へ、みあいかうしちを、とりなかされまいらせ候へく候 (鎌倉遺文 51611 文永 6 年 11 月 30 日 平実弘請文案)

注 14 なお、現代語においては「であれ」「にせよ」「にしろ」は概ね同様の意味用法を持つものと思われるが、「であれ」には用言が直接接続することができず(富樫 2005)、以下のように準体助詞「の」を介在させなければ容認されない。

- ・進学するにせよ、しないにせよ、論文は完成させなさい。
- ・*進学するであれ、しないであれ、論文は完成させなさい。
- ・進学するのであれ、しないのであれ、論文は完成させなさい。

この活用語の接続の制限は、中世に起きた「にもあれ」から「にてもあれ」「でもあれ」への変化に起因する。「であれ」類の使用の中心が「もあれ」であった中古・中世前期の時点においては、「用言+もあれ」「体言+にもあれ」が同様の意味を担っており、「もあれ」の前接要素にある程度の自由があったが、使用が好まれる形式が「にてもあれ」「でもあれ」へと固定化すると、「用言+もあれ」を用いることは困難になる。連体形準体法は近世以降に衰退が始まるものの、近世後期以降にも依然として用いられる(原口 1978)ため、中世・近世当時においても「連体にてもあれ」「連体でもあれ」の例が現れる可能性があるが、調査範囲にはその例は見当たらない。このことを「にてもあれ」「でもあれ」が中世以降において名詞接続専用形式になっていたことの現れとして捉えると、「であれ」類に統語的な制約があることが、統語的に自由な「にせよ」類の成立や使用を促したと考えられる。また、近世前期に「ヤア吐すまい〜。鳥が浄瑠璃、よかれあしかれ、おのれが冷えにも、熱気にもなることか。」(心中二枚絵草紙)のような表現が成立することにもこの制約が影響していると思われるが、いずれも十分な根拠を持たないため、「であれ」類の統語的制約については注として述べるに留める。

注 15 「動詞連用形+あり」が「咲けり」のように上代の時点で結合していたこと、「動詞連用

形+も+あり」が例外的であることから、この「見まれ」も例外的なものと思われるが、本稿では例外として退けることはせず、形容詞と併せて用言として一括することとした。

注16 例えば「されば」と「さすれば」、「にありて」と「にして」のように、補助動詞「す」が状態的な意味で用いられることにより、「あり」と交替しやすいことが知られている（山田1908）。

注17 現代語において名詞節を作る場合、準体助詞「の」が用いられることがあるがその発達は一様ではなく、〈モノ〉〈ヒト〉を表す同一名詞準体の「の」が、〈コト〉を表す同格準体の「の」に先行して発達しており（青木2005）、近世においては「にもせよ」のような形式についても、用言が接続する場合「の」が不要だったと考えられる。

注18 なお、こうした過程を経ながらも現代語では「であれ」「にせよ」「にしる」が同じように用いられている。現代語において、これらの複合助詞は逆接仮定の主要な形式である「ても」と比して文語的であり、「であれ」類、「にせよ」類間の利便性の差が問題となることがないためである。

注19 用例数が十分でないため推測の域を出ないが、「であれ」の成立についても同様の過程が想定できる。

調査資料

用例を収集して集計に用いた資料、本稿で引用した資料のみ記載する。用例調査の一部に、国文学研究資料館『大系本文データベース』、国立国語研究所（2014）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ1.0、長単位データ1.0）を用いた。

※旧大系：岩波書店『日本古典文学大系』、新大系：岩波書店『新日本古典文学大系』、新全集：小学館『新編日本古典文学全集』

上代 古事記歌謡：旧大系／万葉集：佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著（1963）『万葉集 本文篇』塙書房／長屋王木簡：奈良国立文化財研究所（1989）『平城宮発掘調査出土木簡概報21 長屋王家木簡 一』

中古和文 古今和歌集・土佐日記・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記：新全集／うつは物語：室城秀之ほか共編（1999）『うつは物語の総合研究1』勉誠出版／能因本枕草子：根来司編著（1991）『新校本枕草子』笠間書院

中古訓点資料 聖語蔵本菩薩善戒経平安初期点：春日政治（1956）『聖語蔵本菩薩善戒経点』『古訓点の研究』風間書房／西大寺本金光明最勝王経古点：春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 本文篇』斯道文庫／高山寺本大毘盧遮那成佛経疏永保二年点：高山寺典籍文書総合調査団（1986）『大毘盧遮那成佛経疏』『高山寺古訓点資料第三』東京大学出版会

中世前期 狭衣物語・今昔物語集・梁塵秘抄・徒然草・正法眼蔵・正法眼蔵随聞記・宇治拾遺物語・日蓮遺文・堤中納言物語：旧大系／古事談：新大系／十訓抄：新全集／沙石集：新全集（原本は市立米沢図書館デジタルライブラリー 米沢善本152を参照した）／法華百座聞書抄：小林芳規編（1975）『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院／打聞集：東辻保和編（1981）『打聞集の研究と総索引』清文堂／延慶本平家物語：北原保雄・小川栄一編（1990-1996）『延慶本平家物語』勉誠社／解脱門義聴集記：納富常天（1967）『明恵述・高信編「解脱門義聴集記」』『金沢文庫研究紀要』4／書状・古記録：竹内理三・東京大学史料編纂所編（2008）『CD-ROM版 鎌倉遺文』東京堂、東京大学史料編纂所編『古記録フルテキストデータベース』『古文書フルテキストデータベース』、京都府立総合図書館所蔵『東寺百合文書』（京都府立総合資料館「東寺百合文書

WEB」を参照した)

中世後期 覚一本平家物語・連歌論書・能楽論書：旧大系／古今栄雅抄：竹岡正夫（1981）『古今和歌集全評釈 古注七種集成』右文書院／史記桃源抄：亀井孝・水沢利忠著（1965-1973）『史記桃源抄の研究』日本学術振興会／湯山聯句抄：来田隆（1997）『湯山聯句抄 本文と総索引』清文堂／六物凶抄：寿岳章子・樺島忠夫・大塚光信編（1959）『永正本六物凶抄』非売品／句双紙抄：来田隆編（1991）『句双紙抄総索引』清文堂／中華若木詩抄：福島邦道編（1983）『中華若木詩抄』笠間書院／書陵部藏蒙求抄：住谷芳幸氏によるテキストデータ／中興禅林風月集抄：柳田征司「中興禅林風月集抄」『近代語研究』4／天草版平家物語：近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ共編（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版／どちりなきりしたん：小島幸枝編（1971）『どちりなきりしたん総索引』風間書房／エソポのハプラス：大塚光信・来田隆編（1999）『エソポのハプラス 本文と総索引 本文篇』清文堂／ぎやどべかどる：豊島正之編（1987）『キリシタン版 ぎやどべかどる 本文・索引』清文堂／こんてむつすむん地：新村出・柀源一校注（1964）「こんてむつすむん地」『吉利支丹文学集 上』朝日新聞社／日本大文典：土井忠生訳註（1955）『日本大文典』三省堂／大蔵虎明本狂言集：池田廣司・北原保雄著（1972-1983）『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社

近世前期 三河物語：中田祝夫編（1970）『原本三河物語 研究・釈文篇』勉誠社／雑兵物語：深井一郎編（1973）『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院／前期断本：『断本大系』東京堂／西鶴浮世草子：『新編西鶴全集』勉誠出版／好色万金丹・新色五巻書・傾城禁短気：旧大系／けいせい色三味線・けいせい伝授紙子：新大系／好色敗毒散・野白内証鑑・浮世親仁形気：新全集／近松世話浄瑠璃 24 作品：新全集

近世後期 上方洒落本：『洒落本大成』中央公論社／上方断本：『断本大系』東京堂／談義本：新大系／遊子方言・傾城買四十八手：旧大系／江戸洒落本：『洒落本大成』中央公論社／人間万事虚誕計：山口豊編（1998）『人間万事虚誕計総索引』／椿説弓張月：旧大系／東海道中膝栗毛・浮世風呂：旧大系／浮世床：新全集／春色梅児誉美・春色辰巳園：旧大系／春色恋遇染分解：浅川哲也編（2012）『春色恋遇染分解 翻刻と総索引』おうふう／仮名文章娘節用：鶴見人情本読書会（1998-2000）「翻刻『仮名文章娘節用』」『鶴見日本文学』2-4／花の志満台・花暦封じ文・春色江戸紫・恋の若竹：全文検索システム『ひまわり』用「人情本」パッケージ（岡部嘉幸氏作成）

近代 国立国語研究所編（2005）『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社のうち、文体が「口語」であるもの／新潮社（1997）『CD-ROM 版明治の文豪』／新潮社（1997）『CD-ROM 版 大正の文豪』

現代 国立国語研究所編『現代書き言葉均衡コーパス』（中納言 2.1.1, 短単位データ 1.1, 長単位データ 1.1, 新聞・雑誌・書籍のコアデータを対象）

引用文献

青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3, pp.47-60

安達太郎（2002）「命令・依頼のモダリティ」『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版, pp.42-78

犬飼隆（1998）「木簡の「ひとつひとつ」「ひとりひとり」」『萬葉』165, pp.52-54

大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店

菊田千春（2012）「テミロ条件命令文とその成立過程：構文ネットワークの役割」『日本語文法

学会 2012 年度大会予稿集』 pp.59-66

北崎勇帆 (2015) 「虎明本狂言集に見られる命令・要求表現」『日本語学論集 (東京大学)』 11, pp.239-217

草野清民 (1901) 『草野氏日本文法全』 富山房

工藤力男 (1997) 「書評 東野治之著『長屋王家木簡の研究』」『萬葉』 162, pp.46-59

小柳智一 (2014) 「言語変化の傾向と動向」『日本エドワード・サビア協会研究年報』 28, pp.17-27

——— (2015) 「対人化と推意」国立国語研究所国際シンポジウム「文化化：日本語研究と類型論的研究」発表資料

佐野宏 (2007) 「書評 桑原祐子著『正倉院文書の国語学的研究』」『萬葉』 198, pp.55-64

鈴木康志 (2012) 「Imperativ (命令形) をつくらない動詞について」『言語と文化 (愛知大学)』 27, pp.25-38

東野治之 (1996) 『長屋王家木簡の研究』 塙書房

富樫純一 (2005) 「複合助詞『にしろ』『にせよ』『であれ』——その意味と諸用法をめぐって——」『筑波日本語研究』 10, pp.1-18

中村幸弘 (1993) 「放任表現考」『日本文学の伝統 (国学院短期大学国文学会創設十周年記念論文集)』 (中村幸弘 2005 『補助用言に関する研究』 右文書院 所収)

——— (2006) 「近代評論文の放任表現」『国学院大学紀要』 44, pp.159-188

——— (2013) 「「時しもあれ」の「あれ」の活用形」『野州国文学』 86, pp.1-16

仁田義雄 (1991) 「働きかけの表現」『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房, pp.225-262

原口裕 (1978) 「連体形準体法の実態——近世後期資料の場合——」『春日和男教授退官記念 語文論叢』 桜楓社, pp.431-450

柳田征司 (1996) 「東西方言などに認められる「(起キ)ロ」と「(起キ)ヨ」の違いは、いつ、なぜ生じたか」『叙説 (奈良女子大学)』 23, pp.1-16

山口堯二 (1976) 「同語反復的仮定表現の情意性」『国語国文』 45-6, pp.44-54

——— (1995) 「逆接仮定表現の末流」『語文』 64, pp.1-11

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館

湯澤幸吉郎 (1929) 『室町時代言語の研究』 大岡山書店

——— (1954) 『増訂江戸言葉の研究』 明治書院

Boogaart, R & Trnavac, R (2004) Conditional imperatives in Dutch and Russian, *Linguistics in the Netherlands* 21, pp.25-35.

Clark, B (1993) Relevance and “pseudo-imperatives”, *Linguistic and Philosophy* 16, pp.79-121.

謝辞 本稿は、日本語学会 2014 年度秋季大会 (於北海道大学) における口頭発表の内容を加筆修正したものです。発表の席上や、本稿の執筆に際して御助言を賜りました先生方に御礼申し上げます。

———東京大学大学院生———

(2015 年 10 月 5 日 第 1 稿受理)

(2016 年 3 月 22 日 最終稿受理)

The Historical Transition of *Deare*, *Niseyo*, and *Nishiro*

KITAZAKI Yūho

Keywords: imperative form, noninterference, adversative hypothetical condition, conditional sentences

This paper examines the historical transition of *deare*, *niseyo*, and *nishiro*. *Deare* and *niseyolnishiro* are compound particles that contain an imperative form of *ari* or *su(ru)* and constitute an adversative hypothetical conditional sentence. Several studies have proved that *deare* occurred earlier than *niseyo*, but little attention has been given to when *niseyolnishiro* arose and why, even though *deare* was already being used. *Deare* and its variants, the conjunctive form of a verb+*moare* and a noun+*nimoare*, appeared in the Early Middle Ages, evolved into *nitemoare* and *demoare*, and eventually became *deare* in the Early Modern Age. *Niseyolnishiro* and their variants, the conjunctive form of a verb+*moseyo*, appeared in the first half of the Middle Age, evolved into *nimoseyolnimoshiro* in the first half of the Edo period, and became *niseyolnishiro* in the latter half. When the use of *nimoseyolnimoshiro* began, the colloquial use of *nitemoldemoare* decreased, and gradually the use of *niseyo* and its variants exceeded that of *deare*. There were two causes for this shift: (i) The auxiliary verb *su* is suitable for expressing an adversative hypothetical conditional about action or motion, and (ii) *Nimoseyolnimoshiro* are more convenient than *deare* because they can be connected to both substantives and inflections.